

ワシントンの女

岡田信子



ワシントンの女

岡田信子



中央公論社

ワシントンの女

定価九八〇円

©一九八〇

昭和五十五年十一月二十五日初版発行
昭和五十五年十二月十五日再版発行

著者 岡田信子

発行者 高梨 茂

印刷 三晃印刷
製本 日本出版工業

発行所 中央公論社

〒104 東京都中央区京橋二一八-七
振替 東京二二三四
検印廃止

目次

ワシントンの女

5

アメリカン・ドリーム

89

藤色の豊作

151

ニューオーリンズ・ブルース

185

装
幀
三
村
淳

ワシントンの女

ワ
シ
ン
ト
ン
の
女

ドイツ製の白ワインを冷蔵庫に入れ、ついでにセロリーの束とレモン一個を取り出した。

その瞬間また同じ疼き^{いた}が体内で烈しく燃え上がるのを意識し、美喜は思わず、「うー」と低く声を立てていた。

「マミー、なにかいった？」

L型になっているキッチン^の横の食堂で、独り早目の夕食をしている娘のアンが、スパゲッティ・ソースを垂らした顎を突き出して訊いた。

古いミッキー・マウスの連続物を上映しているテーブル脇のテレビの音を不断より低くしてあるものの、少し離れたキッチンの方で起きた一瞬の低音をよく捕えたと感心し、気恥ずかしくなる。それほどプライベートなことだった。

美喜は黙ってアンに微笑み首を振ってみせた。

今夜二週間振りに夫のジムが帰ってくる。今度の出張は珍しく長期間だった。石油ブームで景気の良いテキサス州ヒューストンに、ジムが渉外課長をしている大手接着剤メーカーが支社を設立するための下準備ということだった。

しばらく離れていたことが、このところ夫婦の間に溝を作っている原因を吹き飛ばしてくれた

ような錯覚を抱かせた。何かにすがらないではいられないからだ。ああでもない、こうでもない、と考えばかり空回りして解決のめどが見当たらないのである。

四年前の新婚時代から満足にいつていた性生活が急変したのは、半年ぐらい前からである。ジムが仕事からの圧迫を必要以上に背負っているせいだろう。それに、彼が十代のときGIとしてヴェトナム戦場で受けた心理的傷痕の再発がたたって、深酒するようになったものとみていた。ジムは真夜中にベッドの中でうなされることがよくある。美喜が揺り起こすと、まるで戦場の野兵のような身構えをし、奇声を上げるのだ。

もともと取引き関係や政治的配慮などで客の接待に明け暮れる職業である。飲みたくななくても飲まなければならない。ジムのは一種のアル中の域に入っていた。その影響は性生活の面で深刻になっていて、ほとんどインポテンツの症状を示していた。一ヵ月に一度か二度行為が可能になりかけるが、美喜の外側の花びらに触れた瞬間に萎^なえてしまう。

二十五になった去年辺りから、美喜はそれまでは追従的な形にしか過ぎなかった夫婦の営みに、もっと充実したものを欲するようになった。

ダブル・ベッドの中で、陸軍ではフットボールの選手をしていたことがある背丈も骨格も人一倍のジムの隣に横たわっていると、どんな寝方をしていてもお互いの体の一部が触れ合っている。酒の量に比例して騒々しくなるいびきを耳にしながら、美喜は夫の体温に煽られ耐えられなくなることがあった。ときには夫のものを掌で包んでみる。そのまま眠りにつけず、掌に力を入れ指先を上下に動かしてみるが、手答えはなかった。

空虚なあえぎが数ヵ月続いているが、美喜は自分の手でそれを満たしたことはない。ただ、欲情を押さえていくうちに、最近では体の方で協力しなくなっていた。今し方体験したような疼きと言おうか、一種の感覚が体の一部に走り、そのままじっと同じ体位ではいられなくなるのである。立っていても坐っていても何をしていても、その感じに続いて応じなければいたたまれない衝動が湧き立つ。が、美喜にはその処理法はわからなかった。タブー意識が邪魔をしていた。

性生活の不満がもとで、二人はよく口論するようになった。ジムは機嫌の良いとき、自分の体調が原因だと認めて、「酒を止めよう。医者に相談する」と、美喜の神経の昂ぶりを一時的に落ち着かせるようなことを言ってくれた。

出張前夜、ジムは具体的な解決法に就いて話し始めた。

「ミキ、僕はね、仕事のすきをみてヒューストン郊外にある陸軍病院へ行ってくるよ。サイゴンで世話になった精神分析医が最近転任してきたことがわかったんだ。彼は僕の過去を知っているから、きつと治してくれるよ。案外短期間に解決出来るかもしれない。ダーリン、許してくれ。君には長いこと不便をかけているなあ。よくわかってるんだ」

許してくれ、という言葉を使ったのは結婚して初めてのことだった。美喜はその一言で、再び希望の泉が湧き上がってくるのを覚えた。

ベッドの上で意のままにならない二つの肉体を重ね、しっかりと抱き合いながらハンモックのように揺れた。

「昔みたいだね」

「そうね。あの頃のことを想い出すわ」

ジムのキスだけは昔と少しも変らない激しさと甘さを含んでいた。美喜は目をつぶった。久しぶりにジムとの出遭いのことが、閉ざされた黒い視界に現れてきた――。

美喜がロスアンジェルスに住む未亡人の伯母のなみ子の家に遊びにきたのは、四年と少し前のことであった。東京の短大を出て間もなくだった。なみ子は美喜の母の姉で、戦争花嫁として最初に渡米した日本女性の一人である。日系人の夫は七年前に亡くなり、美容師を二人置くだけの小さな美容院を経営している。

昼間働きながら、社会人の多い夜間の大学院コースを取っていたジム・デントとは、たまたま美喜が使いにやらされた日本食品店で出遭った。

ジムはガールフレンドの誕生日に贈る変ったプレゼントを探しに立ち寄ったのだった。彼が品定めをしている棚の前を通りかかった美喜に、紙細工の包みを出して説明を求めたのがきっかけになって、会話は思わぬテンポで進んだ。

二人は一目惚れだった。

その日から毎日、電話をかけるか会わずにはいらなかった。やがて、なみ子はもとより日本の両親の反対を押し切って、二人は駆け落ち同様に結婚にゴールインしたのである。

ジムは修士を取ると同時に栄転し、次第に重要性を増してきた首都ワシントン支社の最年少課長として赴任した。渉外部という派手な仕事の関係もあって、ジムは大きなローンをし背伸びをしてこの高級住宅地の中古の家を買った。

住所は、ワシントンの郊外に当たる、メリーランド州ポトマック、クローバー通り三番地。クローバー通りに建った四軒の邸宅の一つである。通りとしてはそんなに短いものではなく、デント家の三百五十坪が例外に小さい敷地で、あとの三軒は夫々二千坪以上の芝生の敷地と、測りしれない広さの雑木林を背後に抱えていた。

美喜の家から見て、クローバー通りの右端は袋小路になっていて、左端には四レインの大通り、メイプル街が抜がっている。メイプル街から入って左側の最初の邸宅が一番地のレイモンド・ギス夫妻の家。ヘリコプター会社社長のレイモンドが、クローバー通りの住人だけを招いたパーティーでみなに告げたところによると、上空から見下ろした四軒の家はデザインや敷地の違いがありながら、さながら四つ葉のクローバーのようだという。

「ポトマックの空地にどんな新住宅が建ち自然美が失われつつあるが、このクローバー通りだけは、僕たち四家族で固守しましょうや。敷地としては、あと十軒建っても良いところだろうが、土地を売らないで四つ葉のクローバーの形をこわさないようにお願いしますよ。どうしても売らなきゃならないなら、僕が買います。四つ葉が崩れない限り僕たちの幸運が続くんですからなあ」

親分肌のレイモンドがウォッカをあおりながら豪語した中で、四つ葉が崩れない限り僕たちの幸運が続くんですからなあ、と妙に迷信じみた言い方をしていたのが美喜にはなぜか忘れられなかった。

ギス家の前の邸宅、と言っても建物自体は左手の斜向かいになるのが、二番地のグREGとリー

シャ・ニールの家。普通なら三番地は前側に飛ぶのに、クローバー通りが出来たときのミスとか言うことで、ニール家の隣的美喜の家が三番地になり、向かい側の四番地にジャック・モリスが妻のアイリーンとティンエイジャーの娘ジュリーと住んでいる。

美喜とジムを除いて、クローバー通りの住人はみな四十代から五十代で、収入や地位の面でもかなり上だった。

引越して早々、美喜は庭の木蔭にハンモックを取りつけた。東京の実家のマンションでは出来なかったことを、次々に試してみたかった。夫婦だけのときはよくハンモックで抱き合い、二人だけに通じる甘ったるい言葉を囁き合い、未来の家庭設計から政治や社会問題まで話し合うという、しっくりした気持の溶け合いがあった。ジムと話していると言葉の障害も邪魔にはならなかった。

アンの誕生とともに、ハンモックは物置の棚に忘れ去られた。美喜は未熟児でひ弱な娘を育てるのに気を奪われ、ジムの世話は二の次になりがちだった。それまで折々家庭でしていたビジネス関係のカクテルやディナー・パーティも、美喜にはまかない切れなくなった。ジムは不満を洩らしながらも外で客を接待するようになり、帰宅の遅いのが習慣になった。

先ほどからストーブの上で煮こんでいる、シチュー用の深い土鍋が音を立て始めた。ハネムーンの間所として伝統的に人気のあるナイヤガラへ行ったとき、道端で手焼きの品を売っていた老

人から買った鍋である。それは一見して、幼稚園の子が粘土をこね丸めたような感じだったが、手に取ってさすったり叩いたりしている間に、普通の焼き物にはない味が滲み出てきて買わずにはいられなくなった。

美喜は旅先で買ったいくつかのみやげ物の中で、この土鍋をハネムーンの記念品にすることにした。「直接火に当てても絶対こわれないよ。ボストン・スタイルの煮豆やスープを作ってみんなさんを喜ばせるんだね。これで煮ると食べ物の自然の味がじっくり出てきて美味しいよ」と、老人は欠けた歯を見せて笑った。

土鍋の蓋の端から吹きこぼれる寸前に、美喜は厚蓋に手をかけていた。化粧直しをしたばかりの顔面一杯に湯気が舞い上がる。

「さかなくさいッ。なに、つくってんの？」

アンが鼻をつまんだ。三つになったばかりのアンは魚嫌いで、魚料理のときは今夜のように彼女の好きな物を別に作ることにしていた。

「パパの好きな魚とレモンのスープよ」

「ねえ、パパはなんじにかえってくるのォ？」

魚と一緒に煮こまないで、仕上げどきに入れて軽くゆでる程度の方がいいセロリーを小さく輪切りにしていた手を休め、美喜はキッチンの壁時計を見上げた。

ジムは四時頃の飛行便でヒューストンを発つ、と言っていた。いつもは美喜がダウンタウンのナショナル空港まで車で迎えに行くのだが、ジムは、「省エネ時代だから地下鉄を利用するか、

リムジンで帰る」と言い含めていった。

「なんじィ？」

質問好きのアンは答えを聞くのが待遠しげに催促した。父親そっくりのウェーヴがかかった茶系の髪の下で、同じ色の深い瞳が母親を見詰めた。美喜の目には、アンが白人の血をそっくり受け継いだように映るのだが、アメリカ人からは逆に、「まあ、ママにそっくりで可愛いわね」などと言われることが多く、内心苦笑していた。

雪国から東京の大学へ入り、そのまま会社員になって東京に住みついた父親似の美喜は、普通の白人とほとんど変らない色白なので、他人の目には母娘の違いがはっきり見分けられないのかもしれない。

「もう直ぐよ。アンに何かおみやげを買ってきてくれるかな。二週間も良い子ちゃんだったものねえ」

「パパがかえるまでおきてたーい」

「いいわよ」

美喜は魚の匂いが濃くなっているのに、最後の材料を入れる頃だと察し、セロリーと四つ切りにしたレモンを鍋の中に落した。

ジムがヴェトナムで好きになったというこのスープと、辛口の鶏、野菜の料理資料は、ヴェトナム難民会の事務所からもらったのだ。難民会でボランティアをしている隣家のリーシャ・ニールが調べてくれたものである。労働省局長夫人のリーシャは、アメリカ各地で盛んなボランティア